

「行くンジャ」と「行くジャ」

——岡山県新見市坂本方言における——

友 定 賢 治

A Study on the Usage of “Ikunja” and “Ikuja” in Sakamoto Dialect in Niimi City, Okayama Prefecture

Kenji Tomosada

1.1 は じ め に

問題はこうである。

○ニチヨーノ タンビューニ ガンジョーニ イクンジャ。(日曜日のたびに精出して行くんだ。中女→中男)

ある家の山の手入れがいきとどいているという、前の発言を受けて、その理由(背後の事情<田野村1990>)を述べたものである。一方、

○ミンニヤーバー イッテター イエマーケー ワシガ イク ジャ。(みんなにばかり行ってほしいとは言えまいから自分が行かなきゃしょうがあるまい<おっくうなことだ>。
老男→老女)

気がすまないながらも出かけなくてはならないおっくうな気持ちを述べている。このように「行くンジャ」はいわゆる「説明」, 「行くジャ」は話者の「感情を伴った自己表明」と、文の意味は異なっている。なお, 「ンジャ(のだ)」の意味を「説明」とするのでは不十分であることは、田野村氏(1990)など諸文献で指摘されているが、ここでは、両者の違いを示すことが目的なので、一般的に用いられている「説明」という語をあえて用いておく。

上記例文「行くンジャ」の「ジャ」は助動詞, 「行くジャ」の「ジャ」は文末詞と言えようが、この両者の関係はどうなるのだろうか。文末詞「ジャ」が、助動詞「ジャ」からの転成によって成立した転成文末詞であるならば、その転成はなぜ可能になったのかが問われねばなるまい。ただ, 「山ジャ。」といった「名詞+ジャ」は、当面の考察からは除外する。このような、文末での断定性が、文末詞への転成契機の一つであろうことは、いわば当然のこととして理解したいのである。当方言で考えたとき、その他に、用言に「ンジャ」あるいは「助動詞ジャ」が接続する表現を見ていくことが、転成のしくみを知るうえで重要であるように思う。本稿ではそのしくみについてひとつの意見を述べる。なお, 「名詞+ジャ」を除外しながら、用言に「ンジャ」が接続するものとして扱うのは, 「ン(の)」を準体助詞であるとすれば、自己矛盾とされるかもしれない。ただ, 転成を考えるうえで, 「用言+ンジャ」と「用言+助動詞ジャ」とを対比することが有効になるのである。結論を先取りすれば、文末詞化するきっかけとなる「用言+助動詞ジャ」と、連続しつつもそれに対立するものとしての「用言+ンジャ」とである。

これを解明していく手順として、まず注目するのは、同じ助動詞の用法として「用言+ン

ジャ」と「用言+ジャ」とがあるが、その関係が種々である点である。たとえば、

○ヘーデモ オミヤー ドツカノ フシンノ トキニ アレガ ノーナッタ ヨータ ガ。
ツツミガ。ヘーデ チャーゴローガ トツタンジャロー ユーテ。オクノマデ コー ヨ
バリョーテ。ヘーデ ツツミユ エツト トコノミヤー エートル ガ。ヒガ キエタ
ラ ソノ ツツミガ ナンボカ ノーナツテ。ヘーデ チャーゴローガ トツタジャロー
チャーゴローガ トツタジャロー ユーテ。(それでもお前、どこかの普請の時にあれが
無くなったと言ってたじゃないか。《祝いの金の》包みが。それで泰五郎が取ったんだろ
うと言って。奥の間で、こう、《御馳走を》いただいて。それで、包みをたくさん床の
間においでるじゃないか。あかりが消えたらその包みがいくらか無くなって。それで泰五
郎が取ったんだろう、泰五郎が取ったんだろうと言って。M→N・T)

この発話のなかに、「トツタンジャロー」と「トツタジャロー」とが、同じ「～ユーテ」という位置に見えている。話者は意識して変えてはいないと思われ、この二つが、ほぼ同じように使用されていると考えてもよいと思われる。しかし、一方では、

○オーサキヤー オクツテ ツイータチニ モドツタンジャ。(大阪に《家族を》送って、
一日に戻ったんだ。N→M・T)

○ソノ ミセー ツクダニユ カイ イッタンジャー。(その店に佃煮を買いに行った
のよ。N→M・T)

これらの「モドツタンジャ」「イッタンジャー」を「モドツタジャ」「イッタジャー」に変えることはできない。また、

○ソージャター イワンノジャケー。ソーザ ユンジャケー。(《県南のほうでは総社を》
「ソージャ」とは言わないんだから。「ソーザ」と言うんだから。M→N・T)

*ソージャター イワンジャケー。ソーザ ユージャケー。(＊は内省の文)

「イワンノジャケー」「ユンジャケー」を「イワンジャケー」「ユージャケー」に変えると意味が違ってくる。「イワンノジャケー」「ユンジャケー」というのは、「《皆は知らないことだ
と思うが、県南のほうでは、ここらとは違って》「ソージャ」とは言わないんだから《知ると
驚くだろ》。」という、自分しか知らない知識を披瀝して、相手に驚きを与えようとする説明
の文になる。一方、「イワンジャケー」「ユージャケー」は、「ソージャ」とは言わずに「ソー
ザ」と言う事実を事実のままに述べたものであり、相手に自分の知識を説明してやろうといっ
た性格は前者に比べると希薄である。

このように、「用言+ンジャ」と「用言+ジャ」とのあいだには、①ほぼ同じように用いられるもの、②それぞれに独自の用法のものがあり、3つにわけて例を挙げたが、実際の文例では、上記の3つの説明に簡単には当てはまらない、あいまいなものも多くあり、「用言+ンジャ」と「用言+ジャ」とのあいだは連続的である。そこで、次のことが問題となってこよう。

- (1) どのような意味用法がほぼ同じものとなるのか。
- (2) それぞれに独自の用法とはどのような用法か。
- (3) なぜそのようなになるのか。

これらを明らかにしようとするのがまず最初の目的である。そして、ここで明らかになったことが、文末詞「ジャ」の成立に大きくかかわっていると思うのである。

1.2 問題の検討

文末詞「ジャ」と簡単に述べたが、問題は容易ではない。

○キョーデー モンガ デル ジャ。クチャーヨーナ トケー イキョーリヤー。(怖いものが出るぞ。暗いような所へ行っていると。老女→幼児)

○イカンター イエマー。イク ジャワエー。エット イキトーモ ニヤーガ。(行かないとは言えまい。行かなきゃなるまいな。そう行きたくもないが。老男→家族)

「デルジャ」は幼児を脅しているものであり、「イクジャ」は自分のおっくうな気持ちを表明している。このように、話者の感情を込めた自己表明が「用言+ジャ」によってなされており、1.1の「用言+ジャ」にはないものである。1.1が断定の助動詞であることに異論はないであろう。したがって、1.1の両者の比較は、同じ助動詞内での用法差とされる。一方、1.2は文末詞とされようが、その由来については次の2つが考えられる。

① 断定の助動詞「ジャ」に由来する文末詞

② 「では」に由来する文末詞

藤原(1986)にはこのような「ジャ」形文末詞の由来について、以下のような記述が見られる。(P. 184~P. 185 より抄出)

・山口県下に、「ジャ」形文末詞のおこなわれることが多い。ところで、これらは、「ではないか」などの「では」に近いものようである。

・広島県下の「ジャ」形文末詞も、多くは、「ではないか」などの「では」起源のものか。

・中国地方の「ジャ」が、多く、「では」起源の「ジャ」だとしたら、これはまた、よく熟して、単純強調の、助動詞系文末詞ふうの「ジャ」になったものではある。

このように述べて、断定の助動詞由来のものとするには消極的であるものの、

・岡山県下の、

○ソイジャー ヤメニ スル ジャー。

それじゃあやめにするさ。

などは、どういう「ジャ」であろうか。

・尾道市のことは、「知らないわ。」の

○シラン ジャー。

というのにも、助動詞系文末詞ふうの「ジャ」が見られる。

ともあり、「ジャ」形文末詞の起源については、確定しておられないように思う。筆者にそれを確定する材料があるわけではないが、当方言のものや藤原氏のあげる岡山のものについては、助動詞由来のものではないかと考えたい。その理由は以下のとおりである。

① 当方言で、「~ではないか」と共通語訳すべきものには、次の言い方がある。

○ヒロシマー ゲニ ユー ガナ。(広島は「げに」と言うじゃないか。T→M・N)

この「ガ」「ガナ」が「~ではないか」を意味する頻用の表現法である。

② 先の例文のように「デルジャ」(脅し)、「イクジャ」(おっくうな気持ち)と、感情を込めた話者の主張性があること。

③ 藤原(1986)にある「トギガ ネー チャー。(ともだちがないじゃないの。)《大分》」(p183)のような、「では」由来を明確に伺わせるような言い方が当方言にはないこと。当方言では「トモダチガ ニヤー ガナ。」となる。

このように、1.1の助動詞と、1.2をそれに由来する文末詞と考え、その関係を整理したい。つまり、助動詞と文末詞とでは、どのように表現性に違いがあり、1.1の中のどのような性格を契機として、助動詞が文末詞になるのかという問題である。これが二つめの目的である。

まとめて示しておけば、本稿での目的はつぎのとおりである。

《A》助動詞「ジャ」の用法、「用言+ンジャ」と「用言+ジャ」とではどんな違いがある

か。

《B》《A》の何を契機として文末詞「ジャ」が成立するか。そして、助動詞「ジャ」とはどのような表現性の違いがあるか。

ただ、当方言における「ジャ」形文末詞のすべてが、助動詞からの転成なのかどうか、まだ疑問を残している。次のような言い方である。

○ミンチデ ワルーワルーニ ユー ジャ。(皆でひどいことばかり言うんだよ。中男→中男)

○エット モロートリヤー スマーニ ショワーヤーテ イク ジャ。(たくさんは《給料を》貰っていないだろうに精出して行くのよ《どういことだろうか》。老男→老女)

これらは、「～ではないか」に由来するとして、「ユージャ」を「言うではないか」、「イクジャ」を「行くではないか」としても不自然には思われない。とすれば、主体が一人称でないものは出自が異なるということなのか、あるいは助動詞出自のもの用法の自在性が増した結果であるのか、逆に、「では」出自のもの自在性が増して、助動詞由来のもののように見えるのか、結論が出せない。このようなあいまいさを残したままで、以下を続けていかざるを得ない。

さらに、問題としては別であるが、断定の助動詞に由来する文末詞としての「ダ」は、山陰や東日本で広く見られるのに、「ジャ」「ヤ」は「ダ」ほどには見られないのはなぜかという疑問もあるが、本稿では、この点にも言及することはできない。

1.3 先行参考研究

「のだ」の研究がさかんであるのは周知のことであり、その文献目録は、田野村（1990）に掲載されている。ここでは、いくつかをあげるにとどめる。

- ・田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』（和泉書院）
- ・紙谷栄治（1981）『『のだ』について』（京都府立大学学術報告「人文」第33号）
- ・山口佳也（1975）『『のだ』の文について』（国文学研究」56号）
- ・林 大（1964）「ダとナノダ」（『講座 現代語6』明治書院）
- ・田野村忠温（1993）『『のだ』の機能』（『日本語学』12-11）
- ・小金丸春美（1990）「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」（『日本語学』9-3）
- ・仁田義雄・益岡隆志（1989）『日本語のモダリティ』（くろしお出版）
- ・益岡隆志（1991）『モダリティの文法』（くろしお出版）
- ・佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』（ひつじ書房）
- ・田中 望（1979）「日常言語における『説明』について」（『日本語と日本語教育』第8号）
- ・小矢野哲夫（1981）『『のだ』をめぐる諸問題』（『島田勇雄先生古稀記念論文集』明治書院）
- ・三尾 砂（1942）『話言葉の文法——言葉遺篇——』（帝国教育会出版部）
- ・奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」（『日本語学』3-12）

文末詞「ジャ」については次に詳しい。

- ・藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究 下』（春陽堂）

当該方言の断定の助動詞「ジャ」を共通語「だ」と対照して記述したものに次がある。

- ・友定賢治（1994）「岡山県方言の研究(6)——新見市坂本方言の「ジャ」について——」（『文教国文学』第32号）

その他

・坂原 茂 (1985) 『日常言語の推論』(東京大学出版会)

2.1 考察の方法

同じ助動詞内での用法差と考えられる、「用言+ンジャ」と「用言+ジャ」との間に認められる2種の関係は、①ほぼ同じ用法のもの、②全く違う用法のものであるが、これは、①両者を入れ替えてもほとんど意味に変化のないと思われるもの、②両者を入れ替えたなら当方言の表現として成立しないもの、③両者を入れ替えても当方言の表現としては成立するが、意味が異なるもの、というように言い直すことが可能である。

そこで、考察の方法としては、特定の自然談話資料を用い、そこにみられる両形式を相互に入れ替えてみて、そのテキストの中で、①・②・③のいずれになるかを判定していく。そして、それは何によって決まるのかを考えていくことにより、両形式それぞれの意味用法と関係について結論を得たいと思う。

使用する自然談話資料は次のとおりである。

・岡山県方言の研究(3)——新見市坂本方言の談話資料——(自家版 1992)

・岡山県方言の研究(5)——新見市坂本方言における、同一話者3人による12年後の談話資料——(自家版 1993)

両資料とも、老年男性2名(MとT)、老年女性1名(N)の会話資料であり、3人は、夫婦と近所の分家の主人で、家族同様の間柄である。

なお、この談話資料以外にも、必要に応じて、これまで自然傍受法で収集している文例を用いた。その文例には話者、聞き手を漢字で書いている。さらに、考察の必要上、内省によって(筆者の郷里であるので可能)作成した文例もあるが、それには文頭に「*」の印をつけている。

3.1 「用言+ンジャ」で「用言+ジャ」と交替できないもの

次にあげるようなものが該当するが、田野村氏(1990)の用語で説明できるものは借用している。

① いわゆる説明

(a) 文末の「ンジャー」

○イチビヤー カイモンニ イッタンジャー。(市場に買い物に行ったのよ。N→M・T)

○ネーチャント アノ ホーエー クルマデ イッタンジャー。(お姉ちゃんとあっちのほうへ車で行ったのよ。青女→中男)

○クラシキノ デジャ ユー モンガ オッタンジャー。(倉敷の出身だという者がいたのよ。N→M・T)

この言い方は女性特有のもので、男性には用いられない。この3例は、自分の経験を、聞き手に向かって説明している文である。文末のアクセントが特徴的である。

これは「用言+ジャ」に変えることはできない。

(b) 「用言+タ+ンジャ。」

○ウチャー ケーチャンガ キトルジャー ニヤンカ オモータンジャ。(私は、啓ちゃんが来てるんじゃないかと思ったのよ。N→M・T)

○デーリヤー オービャクショーノ イエー イットツタンジャ。(大変な大百姓の家へ行ったのよ。N→M・T)

○アノ ミチノ ホトリー イエガ アツタンジャ。(あの道のほとりに家があったのよ。M→N・T)

この形も交替することはできない。(a)と同じように、聞き手に向かって説明しているものである。

② 背後の事情を述べる

○フルサトムラ ユー コースー コシラエトルンジャ。(古里村いうコースをこしらえてるんだ。M→N・T)

この文は、「吹屋という所に、そんなにくる人がいるのか。」という質問の次に言われたものである。吹屋に人がくるのは古里村というのがあるからだという背後の事情を述べている。この時は「ンジャ」である。

③ 実情を表す

○オジサンラー モチャー クワンノジャケー。(おじさんなんか餅は食べないんだから。M→幼児)

もちが嫌いだという個人的実情を述べている。何かの背後の事情として述べているものではない。

④ 既定の事柄として述べる(既定性)

○ジナクソ ユーंगा デャーチャー ワカランノジャケー。(「じなくそ」という言葉自体がそもそも分からないんだから。M→N・T)

「じなくそ」という方言自体が、よその人には、最初から分かりはしないんだから、いくら言っても無駄だと言っている。

⑤ 自分しか知らないことの披瀝(披瀝性)

会話している者の中で自分しか知らない事柄を相手に述べる時、「ンジャ」になり、これは交替させることはできない。

○ヘーカラ ヒロカネ ユー イエガ アルンジャ。(それから広兼という家があるんだ。M→N・T)

○アノ サカモトノ ガッコーノ ウエー アルンジャ。(あの坂本の学校のうえにあるんだ。M→N・T)

○ナリワチョーガ ナンカ フルサトムラ ユーノー シトルンジャ。(成羽町がなんか古里村というのをしてるんだ。M→N・T)

⑥ ひとつを特立させる(特立性)

○クルマデ イクンジャ。ジキジャケー。(自動車で行くんだ。すぐだから。T→M・N)

大阪には何で行く予定なのかという質問を受けてのものである。JRでもバスでもない、車であると述べている。

3.2 「用言+ジャ」で「用言+ンジャ」と交替できないもの

① 事実の描写的表現

○ヨー アガランジャケー バックシテ サガリョータ ガナ。(≪車が坂を上がれないものだから≫バックして下がってたじゃないか。T→M・N)

雪道でスリップする車の様子を描写的に表現したものである。

「行くンジャ」と「行くジャ」(友定)

○マツリノ ヒデモ シゴトー ショールジャケー ヒトガ ワラワー。(村祭りの日でも仕事をしてるんだから、ひとが笑うよ。老女→老女)

だれもが休む村祭りの日にも仕事をしている人をそのまま描写的に述べている。

② 単純推量

○アシダチノ ホーガ チート オイー コター ニャージャロー カ。(足立の方が≪雪は≫少し多いことはないだろうか。M→N・T)

○ナツァー オーゼー イクジャロー ノー。(夏は大勢行くだろうねえ。T→M・N)

3.3 「用言+ジャ」と「用言+ンジャ」とで意味がほぼ同じもの

① 「用言(動詞)+ンジャロー」と「用言(動詞)+ジャロー」

「ンジャロー」という推量の形は「用言(動詞)+ジャロー」と交替の可能性が高く、意味的にもほとんど同じように受けとめられる。

○フゴウル ユーナー ホンニ ドツカラ デタジャロー カノ。(「ふごを売る」≪嫁が無断で実家に帰る≫という言葉は、じっさいどこから出たのだろうかねえ。M→N・T)

*フゴウル ユーナー ホンニ ドツカラ デタンジャロー カノ。

この2つの文は、ほぼ同義である。

○ダレガ アギャン トケー トメトルジャロー カノ オモヨーター。(誰があんなところに≪車を≫とめてるんだらうかなと思ってたよ。T→M・N)

*ダレガ アギャン トケー トメトルンジャロー カノ オモヨーター。

この2つの文も、ほぼ同義である。

3.4 「用言+ジャ」と「用言+ンジャ」とで意味が異なるもの

① 「説明」と「描写」

○キノー ドーソーキヤージャッタジャケー マダ オロー。(昨日同窓会だったんだからまだいるでしょ。N→M・T)

*キノー ドーソーキヤージャッタジャケー マダ オロー。

正月で帰省している近所の子が、まだいるだろうと推量するのは、昨日同窓会があったからだという「背後の事情」を説明しているのが上の文である。一方、下の文は、昨日同窓会があったという事実を描写的に述べているものである。

○マー ソリヤー タンビューデ ニャージャケー ノー。(まあそれは度々ではないからねえ。T→M・N)

*マー ソリヤー タンビューデ ニャーンジャケー ノー。

○ガンギューキルジャコトナ ユンジャケー ノー。(雁木を切るなんて言うんだからねえ。M→N・T)

*ガンギューキルジャコトナ ユージャケー ノー。

これらも同様に考えることができる。

② 「用言+ンジャ」が、伝聞の事実であることを明確にする。

○トーニャー タダケデモ ヨンチョードマー アッタジャゲナ。(かつては田だけでも四町歩ぐらいはあったんだそうだ。中男→中男)

*トーニャー タダケデモ ヨンチョードマー アッタジャゲナ。

上の文のほうが、話題になっている家の田の広さを、明確に他者から聞いたこととして述べることになる。下のほうだと、伝聞でなく、自らの推量という文にもなる。

以上は、同じ助動詞内での両形式の意味の違いと言えるであろう。次に、文末詞「ジャ」の意味用法について、助動詞「ジャ」の用法「ンジャ」とどう違うかということから明らかにしたい。

4. 文末詞「ジャ」の意味用法

①「感情を伴う自己表明」

○オテラノ ミチウチー イクンジャ。(お寺の道直しに行くんだ。青男→中女)

鎌を持って歩いて行く近所の男性に、どこに行くのかと尋ねた返答である。これは助動詞であるが、

○ヤレ マー イク ジャウェー。ヌリーヨーナ ビールー フムンジャロー ガ。(やれやれ、まあ行かねばなるまい。ぬるようなビールを飲むことになるんだろうが。老男→家族)

お寺へのお勤めにいやいやながら出かけようとする時のものである。「イクジャ ウェー」に、おっくうな気持ち・いやだという気持ちが表れる。文末詞「ジャウェー」として認定できよう。

○ムコサンワ コンノジャ。トーカラ。(婿さんは来ないんだ。前から。N→M・T)

嫁に行った近所の女性と子供だけが帰省しているのを見て説明している。

*ムコサンワ コン ジャ。トーカラ。

こう言うと、婿が来ないという事実に対する話者のあきれた気持ちが表明される。

○カケー ユータユエモ オーチャクナケー カケンノジャ。(《車にチェーン》をかけると言っても横着だからかけないんだ。M→N・T)

これは、自分の妻が、雪の日でも車のチェーンをかけないという事実をそのままに説明したものである。これを

*カケー ユータユエモ オーチャクナケー カケン ジャ。

としてみると、妻がチェーンをかけないという事実にたいするいらだちがこもった言い方となる。

○アシタリドマー トル ジャウェー。(明日ぐらい《柿を》とらなきゃなるまい。中男→妻)

干し柿にする柿を早くとってほしいと家のものから言われて、渋々言っているものである。

*?アシタリドマー トルンジャ ウェー。(主体が一人称の場合)

* アシタリドマー トルンジャ ウェー。(主体が三人称の場合)

この文は主体が一人称であるかぎり非文である。「～ンジャウェー」というかたちは不可能である。「～ンジャ」で自己の意見を説明することになっており、そのうえに「ウェー(わい)」を加えることはできない。ただし、主体が三人称の場合だと、「あの人が明日ぐらいとるんだ」という意見を「ウェー」で自己表明するという文となって可能である。

②マイナス感情の表明

これまでの例文でもみたように、怒り・あきらめ・いらだちなどのマイナスの感情になる。

○ナンポー ユータ ユエモ アフ モンニャー コタエン ジャ。(いくら言ってもあいつにはこたえないんだよ。中女→中女)

「行くンジャ」と「行くジャ」(友定)

○ウミヤコトバー ユー ジャ。エツト シリモ センノニ。(うまいことばかり言うんだよ。ろくに知りもしないのに。老女→老男)

③当方言の文末詞「ジャ」の意味的特徴

藤原(1986)によると、助動詞からの転成文末詞の意味的特徴は、強調的な主張という点がある。ところが、当方言における文末詞「ジャ」には、単に強調というのではなく、話者のマイナス感情が込められる点に特徴が認められる。

5. 両形式の意味の違い

両形式についての、ここまでの説明をまとめてみよう。

〈A〉助動詞「ジャ」

(1)「用言+ンジャ」

- ・経験の説明
- ・背後の事情の説明
- ・実情を表す
- ・既定性
- ・自分だけしか知らないことの披瀝
- ・特立性
- ・伝聞であることを明確化

(2)「用言+ジャ」

- ・描写的表現
- ・単純推量

(3)「用言+ンジャ」と「用言+ジャ」の両用

- ・推量表現

〈B〉文末詞「ジャ」

- ・感情の表明
- ・マイナス感情

〈A〉(1)の「用言+ンジャ」は、経験・知識を相手に説明する点に中心があり、(2)「用言+ジャ」は、出来事をそのまま描写したり考えをそのままに表明する点に中心がある。(3)の推量表現には、その両方で表現しても意味的には違いの明確でないものがある。そして、出来事をそのまま描写したり考えをそのままに表明するという性格が、文末詞への移行の契機を含み、感情表明という主張性を有する〈B〉の「ジャ」文末詞が成立したのではあるまいか。

では、なぜ「描写」という性格を有することが文末詞への転成を可能にするのかが説明されなければなるまい。先にあげた、次の例文を使って考えてみよう。

○ガングューキルジャコトナ ユンジャケー ノー。(雁木を切るなんて言うんだからねえ。

M→N・T)

*ガングューキルジャコトナ ユージャケー ノー。

「ユンジャケーノー」はいわゆる説明、「ユージャケーノー」は描写的な表現である。まず、この「ユンジャケーノー」を以下のように変形してみる。

*①ガングューキルジャコトナ ユンジャケー。

*②ガングューキルジャコトナ ユンジャ。

このようにしても、同じように説明であり、違うのは相手への持ちかけ方だけである。

「ノー」と持ちかけるか、「ケー（から）」か、あるいは言い切るかということである。一方「ガンギューキルジャコトナ ユージャケー ノー。」という文も言い換えてみる。

*①ガンギューキルジャコトナ ユージャケー。

このようにすると、「ユージャケー」という部分が訴えの中心であることがあらわになる。つまり、「ガンギューキル」という言葉よりもむしろ、「そのように言うこと」「そのように言う人のこと」のほうが表現意図の中心になる。そして、自分たちの言い方とは違う言い方であり、そこに驚きの気持ちが含まれることになる。さらに、「～ユージャケー」というのは、珍しいこと・驚き・あきれたこと・怒りなど、話者にとって不自然なことに叙述内容が限定されることになる。そして、

*①ガンギューキルジャコトナ ユー ジャ。

となると、話者の驚きが鮮明に表現されることになる。

つまり、「ジャ」文末詞成立に関しては、文末に位置して「断定する」という機能とともに、「ンジャ」で表現するような、出来事をいったん対象化し、それを説明するというのではなく、その描写性・現場性のままに表現するという性格が、その場での話者の感情もそのままに表現するという、話者の感情を伴った主張性が明確な文末詞としての表現を成立させたのではあるまいか。

田野村（1990）は、「『のだ』が用いられない場合」として、次のようなものを取りあげている（p. 28～p. 33の内容を整理）。

1. 突発的に生じた事態や事態の兆候を認識して、直ちにそのことを言語化しようとする場合。
2. 話し手の内面に生じたばかりのことがらを表現するとき。
3. 話し手の意志を、その意志決定の時点において表明する場合。
4. 発言に先立って定まっていなかったことがらを表現する場合。
5. 事実としてはすでに定まっていることがらでも、一方的に通告するような場合。

この1～4は、上に述べて来た描写性・現場性と内容としては共通するものを含んでいよう。田野村の上の考察は、共通語を対象としているので、

- ・行くのだ。
- ・行く。

の対立の中でのものであるが、当方言においては、描写性・現場性の表現を、「ル形文末文」に限定して考えるのではなく、「用言+助動詞ジャ」の表現法を含めて考える必要があるということである。

そして、この表現法から、「ジャ」は文末詞化するというきっかけを得ることになったのではあるまいか。

—平成7年9月22日 受理—